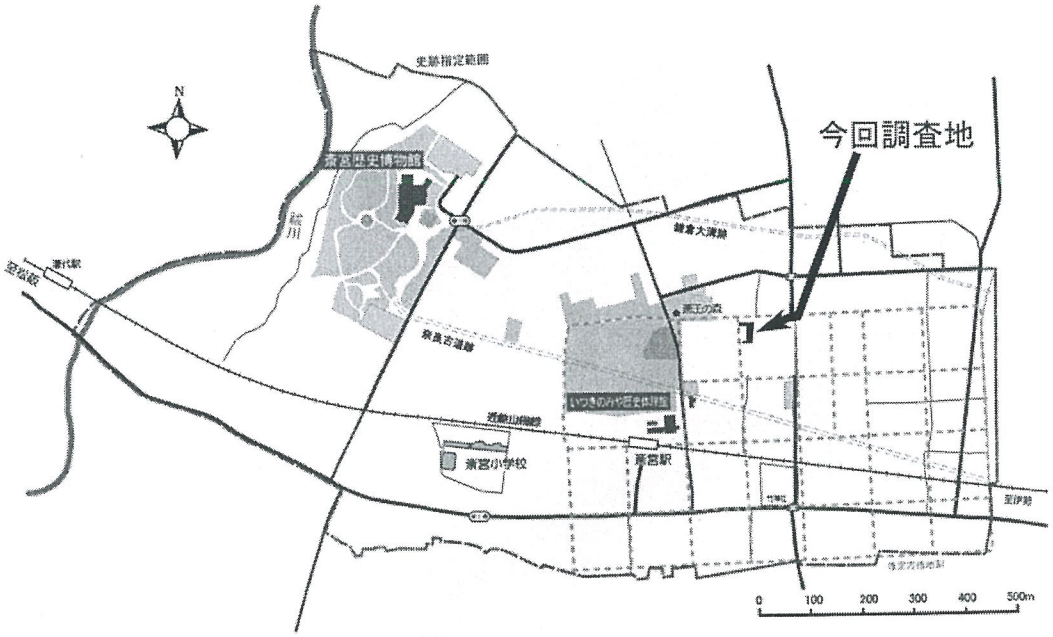
史跡斎宮跡　第178-２次調査
現地説明会資料

平成24年９月８日（土）

明和町

1　はじめに

斎宮跡は、古代から中世にかけて、伊勢神宮に仕えた未婚の皇女である斎王（さいおう）の宮殿と役所があった所です。昭和 45 年度から発掘調査が始められ、東西約２km・南北約 700 m、面積 137.1ha の範囲が国史跡に指定されています。これまでの調査で、史跡の南西部には飛鳥・奈良時代の斎宮跡が、史跡東部には平安時代の斎宮跡があったことが判明しています。平安時代の斎宮跡は、幅９～15mの区画道路が碁盤の目状に通り、最大で東西７列・南北４列の地割（方格地割（ほうかくちわり））が造られていました。道路に囲まれた区画の多くは一辺が約 120mあり、この地割の中に、斎王の宮殿や様々な役所があったと考えられています。最盛期には 500 人を超える役人が勤めており、斎宮はさながら都のような風景であったと考えられます。



2　これまでの調査成果

今回発掘調査を行った第 178-２次調査区は、平安時代の方格地割では、北端にあたる部分で、現在「下園東区画（しもぞのひがしくかく）」と呼んでいる部分にあたります。

この区画でこれまでに行われている発掘調査は 18、23、168、173、174－8 次調査などがあります。その結果、平安時代前期の掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）が規則正しく建てられていること

がわかり、この区画に16棟の建物が規則正しく並ぶ景観が想定されていました。

また、この区画の東には、「西加座北区画」があります。この区画でも同様に平安時代前期の建物が等間隔に建てられていたことがわかっており、米などを納めた倉が存在した区画ではないかと考えられ、現在「寮庫」に想定されています。

「下園東区画」のこれまでの発掘調査は区画の東側で行なわれてきましたが、西側の様相はほとんどわかっていませんでした。そのため、今回は斎宮跡の整備に伴い、区画西側の実態を解明するために約500㎡を調査しました。

3　見つかった遺構

今回の調査では、平安時代の掘立柱建物や土坑、埋納遺構など、多数の遺構を確認しました。建物跡は６棟確認しており、平安時代前期のものと考えられます。

（掘立柱建物）

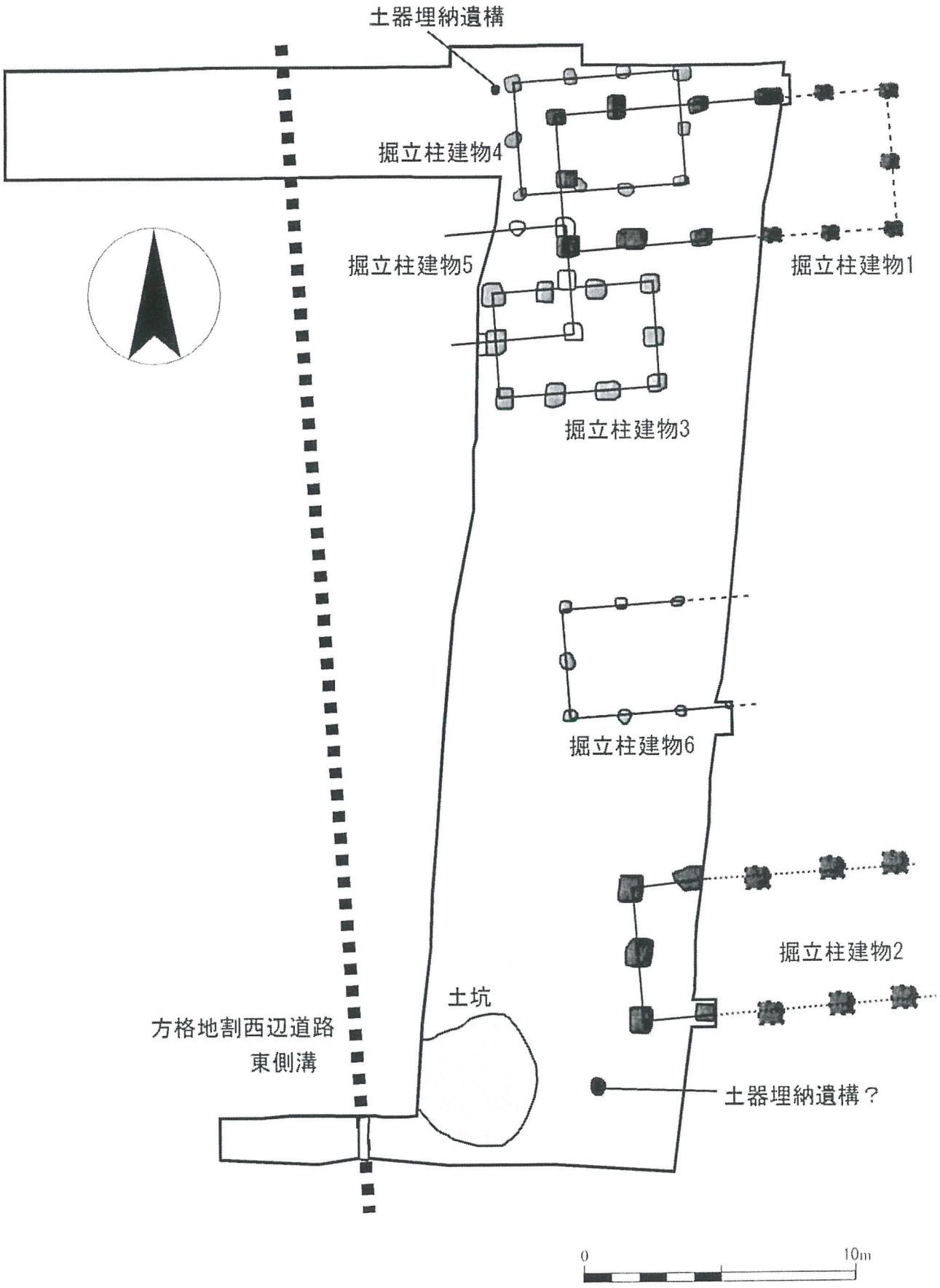
注目される掘立柱建物に、調査区北側と南側で見つかった掘立柱建物１、２があります。東西に長い２間×５間（「間」は柱穴の間の数）の大きさで建てられたと考えられ、その柱の穴も他の建物と比べると大きいことから、区画の中でも主要な建物であると考えられます。

また、これらの建物は、昨年度からの調査で確認された規則正しく並ぶ建物群の一部であると考えられ、想定通りの位置から確認されました。

掘立柱建物３は、建物１のすぐ南で確認されました。同じ平安時代前期に建てられたと考えられますが、屋根が重なってしまいますので、まったく同じ時期ではないと考えられます。掘立柱建物１、２、３の柱穴はほぼすべてが 70㎝ ほどの方形や長方形に掘られており、ほかの建物に比べてていねいに造られた建物だと考えられます。

掘立柱建物４、５はそれぞれ掘立柱建物１、２の柱穴が埋まった後に柱穴が掘られていることが確認されており、建物１、２がなくなった後に建てられたと考えられます。

今回確認した建物跡のほとんどは、柱の並びが真北に向かって西に４°振って造られており、方格地割の方向と一致します。そのため、方格地割が機能していたときに軸線を揃えて造られた建物と考えられます。



斎宮跡178-2次調査　主要遺構配置図(1:200)

	間数	大きさ	時期
掘立柱建物1	2間×5間？	5m×12.5m？	平安時代前期
掘立柱建物2	2間×5間？	5m×12.5m？	平安時代前期
掘立柱建物3	2間×3間	4m×6m	平安時代前期
掘立柱建物4	2間×3間	4m×6m	平安時代前期
掘立柱建物5	2間×3間以上	4m×6m 以上	平安時代前期
掘立柱建物6	2間×3間以上	4m×6m 以上	平安時代前期

主要建物対照表

（溝）

調査区の南側で、南北方向の溝を確認しました。これは平安時代前期に造られた方格地割に伴う道路の側溝と考えられます。この溝は調査区の北側でも確認される予定でしたが、確認できませんでした。後の時代に削られてしまったか、もともと浅い溝であったと考えられます。

（土坑）

今回の調査では、楕円形をした土坑を複数確認しました。これらの土坑からは土師器の皿や椀、甕、須恵器などが多く出土しています。

特に調査区南側で見つかった土坑からは多くの土器が重なるように出土しており、完全な形で出土したものもありました。儀式などに使った土器を捨てた可能性も考えられます。

（埋納遺構）

調査区の北側で径 20cm ほどの穴の中から、土師器の甕の上に逆さにした皿をのせて、蓋をしていた状態のまま確認されました。甕はまっすぐに穴に入れられて直立しており、平安時代になんらかの意味を持って埋められたものだと考えられます。

斎宮ではこれまでも穴に納めた土器が４例確認されており、その中からは古代の銭が見つかっています。これらは地鎮のために納められたものと考えられています。

今回のものは、まだ調査中で中になにが入っているかわかりませんが、これから科学

的な方法も含めて調査を行っていく予定です。

また、調査区の南側でも同じく径 20cm ほどの穴から土師器の甕がやや斜めになった状態で確認されました。こちらには蓋がありませんでしたが、埋納遺構の可能性も考えられます。

4　出土した遺物

第 178-２次調査では、整理箱で約 30 箱の遺物が出土しました。出土した遺物は大半が土師器の杯・皿・甕などでしたが、ほかに須恵器の椀や甕・転用した硯、灰釉陶器の椀、緑釉陶器の椀や、塩を作るための製塩土器などが出土しています。珍しいものでは、裏面にヘラなどで刻んで文字を書いた土器（刻書土器）が見つかりました。

刻書土器には、「安」と書かれており、筆順がわかるほど良く残っています。須恵器の蓋に書かれており、生産地と考えられる現在の岐阜県美濃の窯で焼かれたものと考えられます。

埋納遺構

刻書土器

5　今回の調査のまとめ

第 178-２次調査は、「下園東区画」の北西部にあたります。これまでは、東側を中心に調査が行なわれてきましたが、区画西側の状況はほとんどわかっていませんでした。また、区画東側で確認されていた建物群が西側に広がるかどうかも大きな謎になっていました。

今回の調査で確認できた主要な内容は以下の３点です。

① 区画東側で確認されていた、２間×５間の建物群が西側にも広がることがわかり、区画全体に規則正しく並ぶ可能性が明らかになった。

② 今まであまり確認できていなかった区画道路東側溝が確認できた。

③ 区画内では初となる埋納遺構が確認できた。

以上の内容のほか、これから明らかにしていく点としては、以下の３点があります。

① ２間×５間の建物群がどこまで広がっているかを確認する。

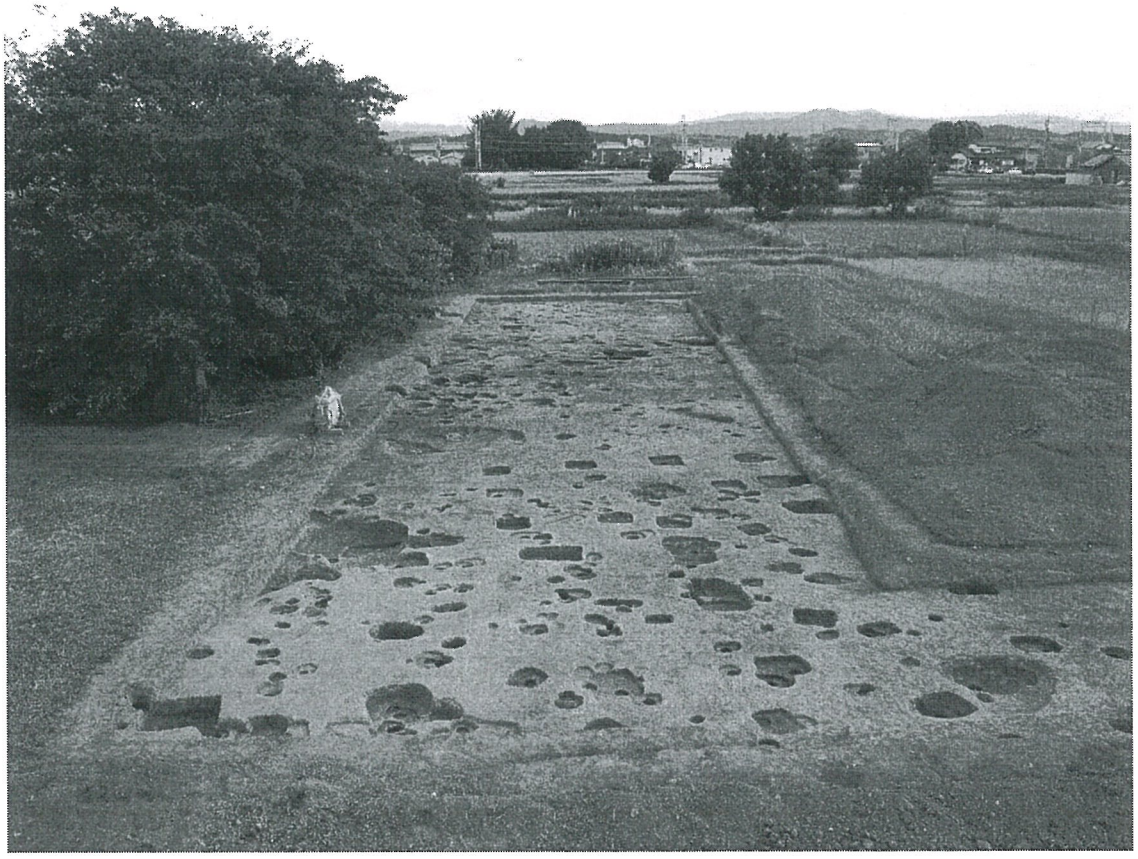
② 区画道路の南側溝を確認する。

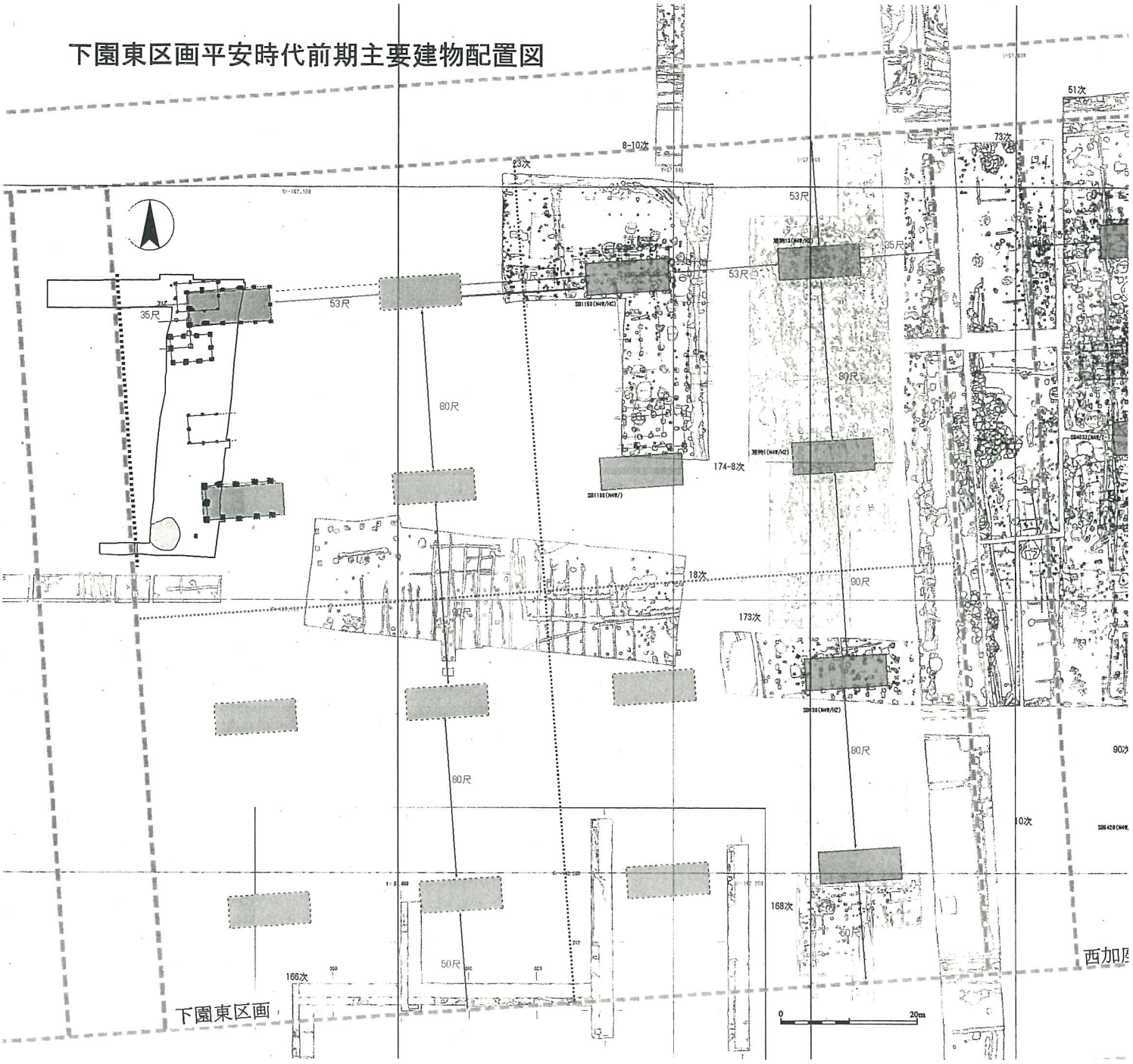
③ 区画内の西側は東側に比べて全体の建物数が少ない。その理由を解明する。

これらの点を、引き続き行われる発掘調査によって明らかにしていくとともに、明らかになった成果をもとに、再整備を行っていきたいと思っています。

現在三重県が調査区南側で史跡整備を行っており、平成 26 年度には平安時代の建物が復元されることになっております。

今後の史跡整備にご期待とご協力をお願いします。



178－２次調査全景

下園東区画平安時代前期主要建物配置図